ダンス・イン・ザ・マフィア

ダンス・イン・ザ・マフィア　３

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19002036

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ♡喘ぎ, モブ霊, 律霊, テル霊, 3P, 影山サンド

誰得？俺得！なマフィアパロです。師匠総受けです。暴力描写や殺人描写を含みます。今回はテル霊とモブ霊・律霊の影山サンドの３Ｐを含みます。お好きな方はよろしくお付き合いください。倫理がアレ。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ダンス・イン・ザ・マフィア　３

「……あなたがドン・アラタカ？」
とん、と窓枠から軽やかに降りた少年がエクボにやんわりと抱きつく。
「僕のことは知ってるよね？さあ、ベッドでこれからのことを語ろうか──」
自分が『伝説の暗殺者』だ、と名乗る少年の目が怪しく光る。
「お、幻惑か」
エクボが珍しそうに看破する。
「なっ！？僕の催眠が効かないなんて──ちっ、こうなったら力ずくで──！」
しゅる、と少年は『能力』で光のムチを作り出す。
「お、能力者か」
次は、ベッドに腰掛けてエクボと少年のやりとりを見ていた霊幻がのんびり見たままを口にする。
「さあ、大人しくファミリアを明け渡すんだ。そうでなければ──」
「師匠！？」
ばたーん！と音を立てて寝室の扉が開かれる。
「『能力』の気配がしました！！大丈夫ですか！？」
パジャマで駆け込んできた茂夫と律が『能力』を出す準備として両手を差し出す。
茂夫の周囲には無数の銃が浮いて侵入者の方を向き、律の周囲にはカトラリーが水平に円形に浮いて全方位対応の構えを見せている。
「能力者がいたのか！？データに無かった……！」
侵入者の少年が焦る。茂夫と律は正確にはファミリアの一員では無い。だから情報から漏れたのだろう。
「どーする？まだ続けるか？」
くあ、とあくびをしながら霊幻が侵入者に声をかける。
「……っ、まだだ──！」
光のムチをエクボ、茂夫、律に向けたが、茂夫の念動力で一瞬で体ごと押さえつけられる。

「がは……っ！」
壁に叩きつけられた侵入者にとどめを刺そうと、茂夫が『能力』を強める。
「はいそこまで。モブ、殺しちゃダメだ。拘束できるか？」
ベッドからみすぼらしい恰好の霊幻がスタスタと侵入者を庇うように歩き出る。
「えっ！？」
侵入者の少年が戸惑う。彼はずっとエクボがドンだと思っていた。
「あなたが、ドン・アラタカ……！？」
「おう、こんな恰好ですまないな」
よれよれのタンクトップとトランクスはあんまりである。そりゃあ伊達にスーツを着こなしたエクボをドンだと思うのも仕方ない。
「ね……ねぇ、ドン。僕をあなたの愛人にしてくれない？」
「ああ？」
「天国を見せて上げるよ。僕のことは知ってるだろう？」
「へぇ」
面白そうに霊幻の目が細められる。
「じゃあ味見させてもらおうかな。モブ、拘束を解いてくれ」
拘束を解いた途端、侵入者は隠し持っていたナイフを霊幻に突き出す。
「師匠！」「霊幻！！」
茂夫とエクボが慌てた声を上げたが、霊幻はパシっと手を弾いてナイフをいなし、手首を捻り上げてナイフを取り落とさせた。
「くそっ！」
「お前ね、ホントに暗殺者か？」
呆れたように霊幻が言いながら侵入者をベッドに放り投げる。
侵入者が着ていたスーツを一瞬でくつろげ、霊幻自体も裸になった。
ぱくり、と霊幻は少年の色の淡い性器を口に咥える。
「あっ！？」
じゅるる、と啜り上げる音が響いて、少年は呆気なく達した。
「な、何を……」
顔を紅潮させて肩で息をする少年に。

すうっと蕩けた目を霊幻は細めて見せる。
どき、と少年の心臓が跳ねた。
「客に一方的にイかされるやつがあるかよ。しっかりしろよ、伝説の男娼」
からかうように霊幻は言いながら、少年に覆いかぶさる。
「お前は綺麗で可愛いなぁ。性器も綺麗で大きい」
すり、と肌をすりつけられて、少年はそのすべらかさにくらくらした。
「能力まで持ってるなんて、凄いじゃないか。俺、どきどきしたよ。お前さえ居れば、世界を獲れるんじゃないか、って」
うっとりした霊幻の声に、侵入者の目が輝く。
「そうでしょう！？僕さえいれば──あてっ」
ぴし、と霊幻は少年にでこぴんする。
「今のは娼婦のリップサービスだ。お前が引っかかってどうする」
「な──僕だって……っあ！？」
霊幻がちゅこちゅこと少年の性器を手で擦り上げる。
「ほらほら、客に主導権を握らせるんじゃ無い」
「……っ」
霊幻の性器に手を伸ばそうとした少年に、霊幻はそっと唇を合わせる。
「え……」
どこか甘い口内に、優しく愛撫する舌に少年は翻弄される。余りに優しい接触に、不覚にも涙が出そうになっていた。
「……キスは捧げろ。魂まで客に明け渡すんだ。そこまでしてやっと夢を見させられる」
「あ……は、はい」
思わず少年は頷く。もはや霊幻の術中だった。
「いいか、基本は騎乗位だ。自分がイかされずに相手の快楽を支配できる」
霊幻の後口が少年の性器を飲み込んでいく。
「……感じてるフリは忘れるなよ？客はそれ見ながら抜いてるみたいなもんだからな」
ニヤ、と笑ってから。

「っんあ♡」
悩ましげな顔になって霊幻はぴくりと肩を揺らす。
「凄っ♡硬くて、イイとこ当たるっ♡♡♡お前のチンポ、好きぃっ♡♡」
身悶えながら腰を振る霊幻が演技してるようには見えなくて、少年はゴクリと喉を鳴らして思わず手を伸ばす。
「はぁーっ♡はぁーっ♡」
その手に頬擦りして目にハートを浮かべて少年を見つめる霊幻に。
少年は、堕ちた。
「イくっ♡イクイクイクぅっ♡」
びゅるる、と霊幻が絶頂する。
「……っぁ」
うねる内部に引っ張られるままに腰を振られて、少年も高みに引っ張られる。
「はあっ……！」
びゅる、と少年が霊幻の中に放出すると同時に。蕩けたままの顔の霊幻は、ピタリとナイフを少年の首筋に当てた。
「え」
「あんっ♡またイくうっ♡♡」
淫らに腰を振り続けながらも霊幻はナイフを微動だにさせない。
少年は快感に逆らえないまま、血の気を引かせていた。
「と、まあ」
突然霊幻が真顔に戻る。
「イってる瞬間ってのは無抵抗になるから、そういうところを狙うわけだ。……お前、暗殺者でも男娼でもねーな？」
「……そうなんです。あなたの名を騙って申し訳ありませんでした、ミエーレ・ヴィリーノ」
「いや、俺はただの元男娼だから」
「僕の目は誤魔化せませんよ、お姉様」
「何言ってんだよ……ちょっと待て誰がお姉様だ」
ぴと、と目にハートを浮かべた少年が霊幻にしなだれかかる。
「僕をあなたの部下にしてください。きっとお役にたって見せますよ、お姉様」

「いやいやいや待て待て待て。何でそうなった」
霊幻が焦って後ずさる。
「情熱的な触れ合いでした……あなたの愛を感じました。僕はもうあなたの虜です。貴方無しの人生なんて考えられない」
「……まいったな」
「そもそも、貴方のファミリアの理念は嫌いじゃ無かったんです、僕。ドラッグも殺しも無いなら、そのまま僕の傘下に入って貰えばいいと思っていました」
すりすりと霊幻の腹を触りながらしゃべる少年に、エクボや茂夫の頬がぴくりと引き攣る。
「でも本物の『伝説の暗殺者』がいるのなら、偽者はその下につくのが妥当でしょう。僕の傘下のファミリアもあなたのものです、レイゲン・アラタカ。僕は花沢輝気、これからはあなたの愛の奴隷です──」
うっとりと霊幻の手に口付ける輝気にエクボや兄弟が殺気立つ。
「……まあ、細かいことは明日考えよう。エクボ、輝気を」
「テルと呼んで下さい」
「……テルを、客間に案内してくれ」
ピクリとエクボが反応する。『客間』とは内装が豪華な牢屋だった。中から鍵が開かないようになっている。
「分かった。ついてこい」
「お休みなさい、レイゲンさん」
投げキッスをする輝気にいよいよ兄弟が殺気立つ。歳が近い分、ライバル視しているのだろう。
「お前らありがとな。助かったわ。じゃ、お休み」
伸びをしながら霊幻は兄弟に礼を言う。
が、兄弟は退室しない。
「ご褒美が欲しいです、師匠」
「僕たちお役に立ちましたよね？」
じろ、と霊幻は兄弟を睨みつける。
「そんなにはしたなかったか、お前ら？この程度で欲しがるな」
「僕たちが師匠の事を好きなのを知ってるくせに」
茂夫が口を尖らせて抗議する。

「目の前であんな子には与えて、僕たちには飴をくれないんですか」
メラメラと茂夫と律の目に嫉妬の炎が灯っているのを見て、霊幻はため息をつく。放置すると良くなさそうだ、と判断した。
「……分かったよ。何が欲しい」
分かっていて霊幻は訊く。
「「あなたが欲しい」」
「……分かった」
パジャマを脱いで霊幻のベッドに上がる２人に、霊幻もまた服を脱いでベッドに上がる。
兄弟は霊幻に抱きついて身体をまさぐる。
「すごい、吸い付くみたいな肌だ」
「悔しいですが気持ちいいです」
「はいはい、そりゃ良かったな……っ」
未発達な指が霊幻の乳首を掠める。
「あ、師匠、今、感じました？」
「兄さん、２人で舐めてあげようよ」
ベッドに霊幻を沈めた２人がたどたどしく乳首を責める。
「ン……」
霊幻としては授乳でもしているような気分になっていた。２人の髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜて、こしょこしょと耳をくすぐってやる。
「っあ！？」
子供扱いされていることにムッとした２人に、先端に歯を立てられて霊幻は思わず２人にすがった。
「後ろふわふわだ……もう挿れてもいいですか？」
「お前らの好きにしていいよ」
「じゃあ、僕のは舐めて下さいよ」
慈しみ合う触れ合いだ。霊幻は律の性器を優しく手と舌で愛撫しながら、茂夫の性器を受け入れる。
「師匠の気持ちいいところ、教えてください」
「……ここ。腹側の、ちょっとぷっくりしてる……っあ♡そうっ♡そこだっ♡じょうずっ……っ♡」

若いだけあって硬い性器がゴリゴリと霊幻の前立腺をえぐる。
「もうっ♡イクから、そこ、やめ……っ♡」
ちゅこちゅこと手を動かすのはやめずに、霊幻は腰を動かしていい所を外そうとする。のを、茂夫は許さない。
「イってください。イかせたい」
「……っ♡、後悔、するなよ……っ♡」
びく、と頭を持ち上げて、霊幻はメスイキする。
「わ……っ」
ナカが搾り取るように蠕動して、呆気なく茂夫は吐精した。
「イっちゃった……」
「じゃ、僕と交代ね、兄さん」
今度は律が霊幻の足を持ち上げる。
「おいで」
霊幻は枕元に茂夫を招いて、性器に残っている精液をじゅっと吸い上げてやった。
「そんな、汚いから舐めなくていいです」
「お前のなら汚くないさ」
「それより師匠……」
茂夫は霊幻のアゴに手を当てて口付ける。
「ん……ん！？」
優しく舌を絡め合わせていたら、ずぱん、と律がイったばかりの中を容赦なく穿った。
「ん！んぅっ♡ンンンンっう♡♡」
唇を茂夫に犯されながら、容赦ない律に霊幻は後ろを犯される。
「ん！んん！ん〜〜〜〜〜〜っ♡♡♡♡」
またイって切なさに捕まるところを求める手を、右手は茂夫が、左手は律がきゅっと恋人繋ぎで慰める。
「霊幻さん、奥に出します」
引き絞られた律が額に汗を浮かべながら裏筋を内部に擦り付けて、じんとした射精感を味わう。
「ん……♡」
若い熱さに、茂夫の舌に喉を犯されながら霊幻は身震いして目を細め、ぴゅく、と精をこぼした。

※

「俺、今日、休みたい……」
次の日。５人も相手して疲れたどころではない霊幻がコンシリエーレのエクボに弱音をこぼす。
「娼館のシャワーが水しか出ないって苦情が出てるんだから、仕方ねぇだろ。それに輝気への尋問だってお前がしなけりゃいけねぇんだから」
「ううう……」
霊幻は仕方なく起きて身支度をする。
「……俺たちが『ミエーレ・ヴィリーノ』の偽者を捕まえて、３つのマフィアを傘下に加えたって話はもう街中に広まってる。気を付けろよ、霊幻」
「……俺、マフィアを傘下に加えるなんて了承してないんだけど！？」
「噂に文句を言うなよ。どちらにしろ落とし所を探って早く手を打たないと──」

「ドン！！」

部下の１人が血相を変えてプレゼント・ボックスを持って寝室に駆け込んでくる。
「おい！ここはドンの寝室だぞ！？」
「すみません！緊急自体で……ネオ・チオード（爪）・ファミリアと名乗る連中から、こんなものが……」
プレゼントボックスを開けると、レイゲン・ファミリアの幹部の１人と目が合った。
「うーん、これは落とし前を付けて貰わないといけないことをしてくれたなあ」
霊幻は幹部の目をそっと手で閉じてやる。

レイゲン・ファミリアが輝気をたぶらかしたせいで、マフィアの世界が一斉に興奮しだしていた。

続